

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	機能再建・再生科学領域 泌尿器移植再生医学教育研究分野 氏名 日下 歩
指導教授氏名	大山 力
論文審査担当者	主 査 青木 昌彦 副 査 小林 恒 副 査 黒瀬 顕
<p>(論文題目)</p> <p>Detecting asymptomatic recurrence after radical cystectomy contributes to better prognosis in patients with muscle-invasive bladder cancer (筋層浸潤性膀胱癌における膀胱全摘術後の再発とその予後についての検討：無症候性再発の検索は良好な予後につながる)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>筋層浸潤膀胱癌に対する標準治療は膀胱全摘術と所属リンパ節郭清術であるが、5年生存率は50%程度と不良であり、術後フォローアップ計画を含め治療成績の改善が課題である。膀胱全摘後の標準的術後フォローアップ法は未だに確立されていないばかりでなく、定期フォローアップによる無症候性再発の検索が予後を改善するか否かに関しても結論が出ていない。本研究では、定期フォローアップによる無症候性再発の早期発見が患者の予後を改善するかについて検討した。</p> <p>方法としては、1996年5月から2017年2月まで弘前大学医学部附属病院および関連施設で膀胱全摘術を受けた筋層浸潤性膀胱癌患者581例を対象とし、定期フォローアップが実施された。再発患者を無症候性再発、症候性再発の2群に群分けし、単変量・多変量解析、及び傾向スコア逆数重み付け法(IPTW法)を用いて全生存率に対する再発様式の影響を評価した。筋層浸潤性膀胱癌患者581例中、175例に再発を認め、データ欠損のある12名を除外した163名で解析が行われた。</p> <p>無症候性再発は76例、症候性再発が87例であり、両群間の患者背景には有意差を認めなかったが、無症候性再発群と比較して症候性再発群で、再発後の化学療法施行数が有意に少なく、死亡イベント数も有意に多かった。Cox回帰分析を用いた単変量解析では、術後の全生存率、再発後の全生存率を説明する因子として年齢、リンパ脈管浸潤、術後の化学療法施行数、再発様式が選択された。IPTW法で背景調整を行ったCox回帰分析では症候性再発が全生存期間における独立した予後不良因子であることが示された。</p> <p>本研究は、定期的なフォローアップによる無症候性再発の早期発見が膀胱全摘術後の予後改善に寄与する可能性が示唆された初めての論文であり、その学術的・臨床的意義は高くよって学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Medical Oncology